

清美寮お疲れ様でした、 そしてありがとう



昭和46年入社 佐藤 美由紀

今から半世紀以上前になります。昭和46年の早朝、九州福岡より都会への夢を胸いっばいに膨らませて上京、最初の居住地となったのが清美寮でした。

右も左もわからない田舎娘が何とか都会生活に慣れ、道を外すこともなく今日の日を迎えられているのは、清美寮での寮生活があったればこそと実感しております。昭和46年度入社の人B班の部屋は、当時増築されたばかりの5階と称する半地下下でした。

半地下とはいえ、ベランダがとてども広く日差しが降り注ぐ、とても明るい部屋でした。6畳の部屋に寮生が3人、暖房は炬燵のみといった、

村タキ先生と、管理人のされていた稲崎のおばちゃんに、きつちりと着付けを教え込んでいただきました。以来52年、今ではどこに行くにも着物で出かけるほどになりました。今でも着物の師匠の多喜先生とは着物の愛好家として、一緒に着物を楽しんでいきます。

71年の我が人生のほんの1コマにしか過ぎないはずの、清美寮での寮生活でしたが、私にとって全ての原点であり、わが青春の大舞台でした。

そんな清美寮がなくなってしまうのはとても寂しいと思いますが、これも時の流れと云うことでしょうか…。

この知らせを聞いて、はるか遠い昔の私の若かりし頃に、改めて思いを馳せることができました。清美寮お疲れ様でした。清美寮ありがとう。

清美寮の思い出

清美寮、そして 稲崎ご夫妻の思い出



昭和38年入社 木村 タキ

6畳ひと間に3人狭くても苦しさや失敗を慰め会えた場所、それが清美寮でした。

私は完成と同時に入寮し、諸先輩を見習いながら共同生活に親しみ、部屋替えも繰り返しながら最年長になっていました。一方で助教を受け持つようになり、いつも教習中盤を過ぎる頃になると、バテ気味になってしまうのですが、そんな時「少しスタミナをつけて」とニンニクをたっぷり効かせた、おばさんの手料理をご馳走なつて、元氣を取り戻したことも度々です。何か困ったことがあると相談にも乗っていただき本当にありがたく、管理人稲崎様ご夫妻には、義理の親とも言えるほど、大変お世話になりました。玄関の正面には、おじさんが見事に咲かせたサツキや月下美人などの鉢が置かれて、季節の花々が、朝夕の入りの慌ただしさを和らげてくれました。冷房装置などない時代とあって、夏にほんの少し開けた窓が原因で痴漢騒ぎになったり、冬には餅つき大会で会社の役員の方々まで、杵を振り上げてついでくれた餅を、おばさんの指導で寮生みんなで丸めたり、辛み餅で小皿に分けたり、何かある度にワイワイガヤガヤと、賑やかな日々でした。

でも、なんとといっても1年最高の盛り上がりはクリスマス